令和6年度

非核平和広島派遣事業

― 報 告 書 ―

愛　西　市

非核平和広島派遣事業の実施にあたって

愛西市は、平成17(2005)年９月９日に「非核・平和都市宣言」を行いました。原爆による被爆体験が風化されつつある中、核兵器の脅威と人類の恒久平和への願いを改めて訴えることを誓うものです。また、平成 24(2012)年9月には「平和首長会議」に加盟しました。同会議が提唱する趣旨「世界の恒久平和の実現に寄与するために、世界の都市と都市が国境を越え、思想・信条の違いを乗り越えて連携し、核兵器の廃絶に向けて努力する」に賛同し、国内外の都市とともに平和の尊さを伝えていくためです。

本市では、被爆の実相と平和の大切さ、命の尊さを知り、戦争の悲惨さ、残酷さを将来にわたって伝え、戦争や核兵器の無い平和な未来を築くため、市内の中学生を広島市へ派遣する「非核平和広島派遣事業」を毎年実施してきました。令和6年度は、8月5日、6日の2日間において、市の代表として中学生24名を派遣いたしました。

生徒たちは、市民の皆様が平和の祈りを込めて折って繋げた千羽鶴を、平和記念公園内にある「原爆の子の像」に捧げました。そして、広島平和記念資料館の見学や平和記念式典への参列などを通じて、戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて学ぶことができました。

本書には派遣生徒たちの感想文を掲載しています。実際に現地で見て、聞いて学んだこと、感じたことを素直に記した感想文です。一人でも多くの方にご覧いただき、平和の尊さを改めて感じ、考えるきっかけとなれば幸いです。

派遣された生徒は、各中学校で事業報告会を行うとともに、翌年の市平和祈念式では代表生徒が感想文を発表するなど、平和への思いを言葉にして伝えてまいります。

おわりに、千羽鶴の作成、糸通しにご協力いただいた市民の皆様に、お礼を申し上げます。

令和6年度非核平和広島派遣事業（概要）

目的

愛西市内の中学生の代表者を広島県広島市へ派遣し、袋町小学校平和資料館、平和記念公園、原爆ドーム、平和記念資料館等の見学をするとともに、8月6日に広島市において開催される平和記念式典に参列し、平和の尊さを学ぶ機会とする。

また、引率教諭は、行程中生徒を指導し、自身も平和について学んで自己啓発するとともに、学校での平和教育等に活かすこととする。

派遣団

愛西市立中学校の3年生24名及び引率者6名（教諭4名・市職員2名）

- 生徒（24名）

（佐屋中学校）
大鹿　桂汰　榊原　湖子　髙木　琳音　五島　りのあ
（永和中学校）
服部　圭伸　加藤　瑠輝　宇佐見　奈那　川村　心月
（立田中学校）
黒田　恵海　杉村　宗建　伊藤　未來莉　宮崎　琥太朗
（八開中学校）
西川　幸希　福田　悠真　鶴見　明梨　福田　唯乃
（佐織中学校）
宮本　悠生　遠藤　陽大　佐伯　柚歩　宇佐美　結女
（佐織西中学校）
伊藤　陽南　野口　斗希　平野　登有　水野　和泉

- 引率教諭（4名）

中田　梨颯（佐屋中学校）　川前　歩（永和中学校）
江口　直子（八開中学校）　河村　恭範（佐織中学校）

- 市職員（2名）

伊藤　昭良（学校教育課）　服部　陽介（経営企画課）

実施日及び場所

- 派遣説明会：令和6年7月1日（月）
  （愛西市役所）
- 派 遣 日 程：令和6年8月5日（月）～8月6日（火）
  （広島県広島市）

活動内容

- 派遣説明会への参加、副読本の通読
- 千羽鶴の献納、献花（平和記念公園内原爆の子の像、原爆死没者慰霊碑）
- 平和記念公園、原爆ドーム、平和記念資料館、袋町小学校平和資料館等の施設見学
- 平和記念式典への参列
- 派遣事業感想文の作成
- 各中学校において派遣生徒による事業報告会の実施
- 翌年の愛西市平和祈念式において代表生徒4名による感想文発表

❖広島派遣　１日目　令和６年８月５日　≪広島県広島市内≫

1. 袋町小学校平和資料館　13:10～

袋町小学校平和資料館を見学して、被爆の伝言「あの日の声が聞こえますか」をビデオ視聴しました。被爆直後から救護所として利用された旧袋町国民学校校舎内には、消息を伝える伝言の跡が残っており、家族との再会を望む思いと混乱の様子が伝わってきました。

2. 原爆ドーム　14:00～

原爆ドームのもとの建物は、1915 年に建てられた「広島県産業陳列館」です。緑色のドーム屋根を有する洋風の建物で、広島市民に親しまれ、美術展や博覧会、工芸品展など多くの事業に利用されていました。原爆が上空約 600m、北西に約 160 メートルの至近距離で炸裂し、館内にいた方は即死でしたが、爆風をほぼ垂直に受けた建物は完全に倒壊することはありませんでした。壁など一部を残したその姿は、原爆の惨禍を訴えるためにたたずんでいるような迫力でした。

3. 平和記念公園　14:15～

原爆で亡くなった子どもたちを慰霊し、世界平和を呼びかける「原爆の子の像」の下へ、ボランティアや市民の方によって作りあげられた千羽鶴を生徒一人一人の手で奉納しました。像の周りには世界中からの千羽鶴が捧げられており、人々の平和への祈りが強く感じる場所でした。その後、原爆死没者慰霊碑に献花し、手を合わせて平和への祈りを捧げました。

4. 広島平和記念資料館見学　15:00～

火傷・負傷にあえぐ被爆者の写真や丸焦げとなった三輪車など、被爆の惨状を示す資料が展示されていました。爆風だけでなく、放射線による被害には目では見えない恐怖を感じました。惨禍を生き延びた後も、家族友人を失った悲しみに耐えて、心身の傷や病を抱えながら生きた記録は、魂に訴えるものでした。戦争を知らない私たちが進んで核兵器の恐ろしさを伝える必要があります。

❖広島派遣　２日目　令和６年８月６日　≪広島県広島市平和記念公園内≫

1. 平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）へ参列　8：00～

午前7時に平和記念公園へ向け出発し、平和記念式典へ参列しました。
手荷物検査を通過すると、各国の代表や学生を始め、老若男女多様な方々が参列されており、会場は厳粛な雰囲気で満たされていました。一般席（自由席）の参列者には海外の方も多く、平和を願う心は世界共通だと感じました。
今年度は5,079名の原爆死没者名簿が追加奉納されました。死没者名簿の冊数が毎年増えています。平和への行動を繋ぎ続けるよう静かに訴えかけられているようです。午前8時15分に、黙とうを行いました。静まり返った公園内に平和の鐘が響き渡るなか、原爆犠牲者のご冥福を祈るとともに、恒久平和を願いました。
式典に参加し、核廃絶は遠く掲げる理想ではなく、取り組まなければならない、人類存続に関わる現実の問題であると確信しました。

【式典の内容】
- 開式
  - 原爆死没者名簿奉納
    - 広島市長
    - 遺族代表
- 式辞
  - 広島市議会議長
- 献花
  - 広島市長
  - 広島市議会議長
  - 遺族代表・こども代表
  - 被爆者代表
  - 来賓
- 黙とう・平和の鐘
- 平和宣言
  - 広島市長
- 放鳩
- 平和への誓い
  - こども代表
- あいさつ
  - 内閣総理大臣
  - 広島県知事
  - 国際連合事務総長
- ひろしま平和の歌
- 閉式

❖事後報告会　令和６年９月下旬から１０月上旬まで ≪各中学校≫

1. 市内中学校

派遣事業後、それぞれの中学校にて報告会を行いました。代表として広島に派遣され学んできたことや、感じたこと、考えたこと、そして自分たちで調べたことなどを他の生徒たちに伝えました。

派遣生徒感想文

活 動 レ ポ ー ト

❖事前説明会　令和６年７月１日 15：30～　≪愛西市役所南館会議室 1-4≫

1. 主催者あいさつ

市長、教育長よりあいさつがありました。
市長からの「愛西市の代表として、広島にて平和についてしっかり学んで頑張ってきてください」との激励メッセージに派遣団としての決意を新たにしました。

2. 班分け・自己紹介

各中学校から生徒１人ずつ、計６人の班をつくり、４班に分かれました。広島派遣中は、この班別で行動を共にします。
この日、ほとんどの生徒は初対面です。生徒、引率の先生も含めて１人ずつ自己紹介を行いました。まずは名前を覚えるところから、活動が始まりました。

3. 日程等の説明

市職員より事業の日程について説明がありました。
実施要領を見ながら、集合時間や各行程、持ち物などを確認しました。

4. 事前学習

ＤＶＤ鑑賞「ヒロシマの記憶」
原爆が投下されて２か月後、日本人によって撮影された焦土と化した広島の様子の映像です。原爆投下の際に目標にされたと言われる「相生橋」と、爆心地から460mの位置にあった「袋町国民学校」の被害を知ることができました。どちらも広島派遣において、実際に通る予定の場所です。
この動画から、広島で起きた惨状について事前に理解を深めることができました。

広島派遣事業に参加して

佐屋中学校　大鹿 桂汰

太平洋戦争を皮切りに始まった第二次世界大戦では、多くの人が戦争に巻き込まれ、罪のないたくさんの人たちが命を落としました。また、広島に原爆が投下され、多くの人が亡くなり、今でも後遺症で苦しんでいる方や、行方不明のままの方がいます。自分が小さい頃に戦争や原爆の話を聞いたときは、よく分かっていませんでした。しかし、中学生になり、授業で詳しく知ってからは、戦争や原子爆弾の恐ろしさ、大切な人が亡くなる悲しさ、生きたくても生きられなかった人の苦しさなどが考えられるようになりました。今回参加させていただいた非核平和広島派遣事業で、より深く考えることができました。

平和記念資料館では、原子爆弾がどれだけ恐ろしいものか、改めて知ることができました。原子爆弾によって起きたたくさんの被害に関する写真や、原子爆弾によって亡くなられた方が着ていた衣服や、持ちものなども展示されていました。戦争で得られるものなんて何一つなく、得られるものは悲しみや憎しみだけであると、たくさんの資料を見て感じました。

僕は、広島でたくさんのことを学んだ中で、戦争は終わっても、人々の心の中では終わっていないということを感じました。原爆によって大切な人が亡くなった方の悲しみは終わることはありません。戦争を繰り返さないためにも、僕たちも戦争や原子爆弾が投下されたことを過去のことだと思わず、これからも考え続けるべきだと思いました。

今も世界各地で戦争が起きています。広島で起きた悲劇が二度と繰り返されないためにも、想いを伝え合い、武力ではない方法で解決していくべきだと思います。戦争や争いがなくなり、人々が安心して暮らせるようになるために、僕にできることを考え続けていきたいと思います。

世界が平和になるために

佐屋中学校　榊原 湖子

私は、非核平和広島派遣事業で、原爆ドームや平和記念資料館を見学し、平和記念式典にも参列しました。その中で特に印象が残ったのが、資料館で見た資料です。全身を炎で覆われている人たちの絵や、原爆症を患った方々の写真など、被爆した際の状況をそのまま映し出したかのような資料がたくさんありました。私は、学校で戦争の悲惨さを理解したつもりでいました。しかし、資料館を見学して、想像できないくらいの痛みや辛さ、悲しみで溢れていたことを知りました。

また、平和記念式典に参列して、印象に残った言葉があります。それは、こども代表の子どもたちによる平和への誓いの言葉です。「願うだけでは平和は訪れません。」、この言葉に私はハッとしました。日本は今、平和であると言えます。だから、過去の広島の様子を知り、同じことを二度と繰り返さないでいようと思うだけでいいと思っていました。私は心の中で、戦争や被爆は、他人事と思っていたのかもしれません。経験したことのない戦争は二度と起こらず、こんな平和が当たり前に続くと思っていたからです。ですが、その平和は突然崩れることを学びました。もしかしたら今後、戦争が起き、私たちの住む地域に原爆が投下されるかもしれません。私はそういった危機感を持ち、戦争が再び起きないように行動していかなければいけないと強く思いました。

戦争の本当の悲惨さや平和の尊さは、戦争を経験したことのない私にとっては、広島に行かなければ絶対に分からなかったことでした。だからこそ、非核平和広島派遣事業は、貴重な経験になりました。この経験を無駄にせず、平和を守るために相手の話をよく聞くことを意識したいです。相手の思いを知り、受け入れることで、身近な争いから減らしていきたいです。その行動が世界中に広がり、平和な日が来るまで、私はずっと続けていきたいです。

無駄にしない

佐屋中学校　髙木　琳音

僕は、核兵器がもたらした悲惨な歴史や平和の尊さを学ぶ非核平和広島派遣事業に参加して、とても多くのことを学びました。

広島は、原子爆弾が投下されたことにより、多くの人々が命を落とし、街は壊滅的な被害を受けました。僕は、その出来事を知っていたし、見る前まではイメージはついていたけれど、教科書などで見る何倍も圧倒されるものがありました。核兵器とは、これほど恐ろしいものなのかと、言葉では言い表せないものがありました。今でもそんな気持ちになるので、実際に体験した人は、僕たちが思う以上の恐怖と絶望感を味わったと思うと、心が苦しくなりました。僕は改めて、戦争の無意味さを実感しました。たくさんの人の命を奪い、平和を奪う出来事はもう二度と起こしてはいけないし、だからこそ、日本国憲法の三原則に「平和主義」があると思いました。

僕たちは、戦争のない時代に生まれ、今も平和に生活ができています。ですが、世界のどこかで今も戦争が続いています。非核平和広島派遣事業に参加して、戦争の恐ろしさを目の当たりにしたからこそ、日本だけではなく、世界にも視点を向けていくことが必要だと思いました。今回の広島平和記念式典には、フランスやインドなど、世界各国が参加しています。きっとこの行事に参加したのは、自分の国だけの平和を望んでいるのではなく、世界の平和も望んでいるからこその行動だと思いました。

今からでも僕たちができる行動は、今回の広島派遣での出来事を周りの人に伝えたり、募金や家にあるもので支援したり、売上の一部が寄付されるという商品を購入したりなど、自分なりの考えを持ち、興味を持っていくことだと思います。戦争を通じて亡くなった人たりが僕たちに残してくれたことを、決して無駄にしてはいけないと強く思いました。

平和を守るために私ができること

佐屋中学校　五島 りのあ

今回私は、非核平和広島派遣事業に参加させていただき、初めて原爆ドームや平和記念資料館に行きました。戦争のことはニュースや教科書に載っているわずかなことしか知っていませんでしたが、私自身の中で、戦争は恐ろしく、多くの人の命を奪うもので、二度と起こってはならないものだと認識していました。勝手に戦争のことを分かった気になっていましたが、今回の経験で自分の中の価値観を変えることができました。

実際に資料館や原爆ドームを訪れた際、実物大の原子爆弾の図を見て戦争の凄ましさを感じ、多くの展示から亡くなった方や残された遺族の方々の心からの叫びを目にし、言葉では言い表せない気持ちになりました。また、豊かな街並みが一転して真っ黒な街になった様子や、全身焼けただれて苦しんでいる方の写真など、多くの尊い命を奪った痕跡が、今でも残っているのを見て、戦争の恐ろしさを改めて痛感しました。多くの命を一瞬にして奪い去った原子爆弾に対して、憎しみさえ感じました。

平和記念式典では、今でも苦しみ続けている方がいること、行方不明者がいまだにいることに驚きを隠せませんでした。原子爆弾は二度と地球に落とされるべきではないと、強く強く思いました。

今回、戦争・平和・命の重みについて考えていく中で、体験者だけが分かる恐怖や辛さは、今後も次の世代へつないでいく必要があると感じました。また、今回の経験を通じて、二度と戦争が起きてはならないという言葉の重みが、私の中で大きく変わりました。平和を守るために、自分たちには何ができるのかを考え続け、今の幸せな生活、自分や周りの尊い命を大切にして、これからも生活をしていこうと思います。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

広島派遣を終えて

永和中学校　服部　圭伸

僕は初めて広島に行きました。この二日間では戦争の怖さや命の尊さについてすごく学ぶことができとても貴重な体験となりました。広島に行く前までは正直「戦争なんて自分には関係ない」など軽い気持ちで広島に訪れました。でも実際に広島の資料館や原爆ドームなどを見ると言葉を失いました。79 年前に一発の原子爆弾が投下され多くの人の命や日常が一瞬にして全て奪われました。広島から帰ってきた今でもそのことを考えると戦争に対する恐怖や悲しみが溢れます。そして、二度と戦争を起こしてはならないと強く思いました。

今もなお、ウクライナとロシアの戦争が続いています。幼い子供も含め無差別に虐殺されています。戦争は誰一人、幸せになりません。戦争をなくし、核兵器などもなくし、日本だけでなく世界中が平和になればいいと思います。

今回広島派遣に参加して、原爆の被害や恐ろしさ、後遺症で苦しんでいる人がいることを学んできました。日本だけでなく世界中の人々が忘れてはいけない出来事だと思います。僕はこの２日間で学んだことを周りの人や友達に伝え、たくさんの人に戦争のことを知ってもらいたいです。そうすることによって平和な世界が少しでも近づくのかなと思います。

また、今、自分がどれだけ幸せで平和な日常を送ることができていることを強く実感し感謝しなければならないと思いました。なので、１日１日を大切にし、家族や友達と笑い合えていることを大切にしていきたいと思います。僕は今回の派遣事業に参加し、平和について深く考えることができました。戦争がなく誰もが楽しく生活できる世界になるように、平和な時代を担う一員として自覚を持って行動していきたいと思います。

広島派遣に行って

永和中学校　加藤　瑠輝

僕は初めて広島に行きました。広島に行く前は広島のことや、原爆のことなど、あまり知りませんでしたが、原爆ドームや資料館を見て一気に広島への見方が変わりました。

若者から老人まで多くの人が原爆によって跡形もなくなってしまいました。軽傷で済んだ人も放射線が体内に入って白血病で苦しみながら亡くなった人もいたそうです。この原爆は、落ちた場所から約二千メートルも離れた場所も被害に遭いました。特に僕の心に残ったのは、放射線を浴びてしまい、血のできものが顔のそこら中にできていた病気です。その病気になっていた人たちは、毎日激痛に襲われて一日中寝たきりで過ごしていたそうです。このような病気が増え、病気になってしまった人だけではなく、家族にも影響があったそうです。食料もあんまりない苦しい生活の中、病気で寝たきりで苦しんでいる姿に家族全員が泣き崩れている写真を見て、僕はとても辛い気持ちになりました。そのような写真を見て、僕は原爆が想像しているものよりもはるかに危険なものなのだと思いながら広島派遣を過ごしました。

８月６日には平和式典に参加してきました。会場には数えきれないほどの人がいました。その中には岸田総理や、広島市長、広島県知事などがいました。この光景を見ただけでこの日はとても大切な一日なのだなと思いました。僕たちが今生きているのは当たり前ではないのだと改めてわかりました。

過去には広島の議会などで、原爆ドームを壊すべき、という意見も出ていたそうです。しかし、原爆の恐ろしさを伝えていくために必要だということで、今も保存されていると聞いて僕は安心しました。なぜなら、人が何万人も亡くなってしまった戦争をもう起こしたくないからです。原爆ドームはその象徴であり、実物を見るだけで、戦争に対する考えがとても変わると思います。なので、僕はこのまま、原爆ドームを残し未来ある子供達にも原爆の恐ろしさを伝えていってほしいと思いました。

広島派遣

永和中学校　宇佐見　奈那

普段通りのヒロシマの朝。1945 年８月６日、彼らの日常は突然、終わりを告げた。あの原子爆弾によって。

広島市 600 メートル上空で爆発した原子爆弾。それだけで何もかも変わってしまった。建物は焼けてなくなったり、原形がわからないほど溶けてしまったりした。それだけではない、町全体が炎につつまれた。近くにいた人々は身体中皮膚が焼け、目も当てられない状況だったという。多くの人々は原子爆弾が落ちた後まだ生きていて、必死の思いで助けを求めた。しかし、それも数十分後に戻ってきたらもう亡くなっていたそうだ。命からがら助かった人も放射線の影響で苦しめられた。放射線によって急に目が見えなくなったり、身体の一部分が痛みだし使えなくなったりした人もいた。残念なことに放射線の影響でなった病気やケガはほとんど治療法がなかった。あったとしても高額で、簡単に受けられるものではなかった。放射線の影響で亡なった人も多くいた。

それだけのことがあっても原子爆弾は廃絶されない。巨大な力を持つ兵器は簡単に手放せない。自国を守るためと使ったら、また使用された国も同じく、自国を守るために使うのは簡単に想像できる。原子爆弾は他の国に戦争を抑止させているかもしれない。けれども、そんな強いものを誰かが使うのは分かりきっているのではないか。

原子爆弾が日本に使用されてから、79 年後の今、私たちはここに生きている。先人たちが作り上げてきたもののおかげで、屋根の下でふかふかの布団で寝られる。どれも私たちにとって当たり前のことである。その当たり前を壊さないよう自分達ができることをしっかり考え、一人一人が自分の役割をつとめることが大切だと思う。

広島派遣

永和中学校　川村　心月

広島派遣全体を通して、私が一番考えさせられたことは、「平和」とは何かです。広島派遣に行く前の私は、「平和」は戦争がない状態のことをただ指していると思っていました。しかし、広島派遣に行ってそれは 180 度変わりました。平和記念式典や平和記念資料館で感じた核兵器の脅威。持っているだけで相手への牽制になってしまう核兵器の恐ろしさ。戦争が起こっていなくても平和が脅かされてしまう。この状況は果たして「平和」と言えるのでしょうか。私は、言えないと思います。

今、日本では戦争は起こっていません。しかし、世界に目を向けてみるとロシアとウクライナ間で戦争が起こっています。さらにロシアは核兵器の使用をチラつかせています。これでは、世界は「平和」とは言えません。また、核兵器の恐ろしさを知っているからこそ戦争をやめさせなければならないのに、ウクライナを支援して戦争を激化させる一因を担ってしまっている日本。平和記念式典に参列している総理大臣をはじめとする政府の方々は何を考えているのかと私は思ってしまいます。

私は、日本全体がもう一度「平和」について、考え直さなければならないと思います。ウクライナを支援しても戦争は終結するのでしょうか。軍事費を増額することに何の意味があるのでしょうか。軍事費は増額する以前に余ってしまっています。なので、あまり増額する意味はないと思います。また、軍事費を増強するぐらいなら被爆者支援に当てた方が有益になると私は思います。なのに、なぜ政府は行わないのでしょうか。行わない理由は世界各国との関係を悪くしたくないからではないかと私は考えます。しかし、その理由だけで戦争をしている国の国民の尊い命や生活を蔑ろにしても良いのでしょうか。私は、ダメだと考えます。だからこそ、私たち一人一人が心を合わせ、力を合わせることが必要です。日本は、核兵器の本当の恐ろしさを知っているからこそ、世界の先頭に立って核兵器廃絶を訴えていかなければならないと思います。先人たちが作ってきた核兵器廃絶の道を私たちもこれからの世代も作り続けていきたいです。

平和を学ぶ大切さ

立田中学校　黒田 恵海

私は、被爆者の方の話を聞いたり、傷ついた写真を見たりすると、自分も辛い気持ちになり、「なぜ戦争について学ばなければならないのだろう。」と思ってしまうことがあります。特に広島の平和記念資料館には、息が詰まってしまうような辛い写真や絵がたくさんありました。しかし、今は以前とは違い、痛々しい写真ではなく、被爆前の写真が多くなっていることを知りました。79 年前のあの日も、今と変わらずに普通に過ごしていたということ、そしてそれが一発の爆弾によって失われてしまったことが『身になって考えさせられる』ようになっているそうです。私は、それを聞いてハッとしました。今まで戦争の様子を見て辛い気持ちになっているだけでしたが、その話を聞いて、過去の戦争と今の自分を重ね合わせて考えることが大切だと気付きました。被爆前の最後の言葉や笑顔を見ていると、今の私たちと同じようにいつも通り過ごしていたこと、核兵器に怯えずに安心して過ごしていることは当たり前ではないことを伝えられているように感じ、命の尊さを実感しました。また、戦争の写真を見て、ただ辛いと思うだけでなく、二度と繰り返さないように平和に向けて行動していくことが大切だと思いました。

今でも、戦争や紛争をしている国や核兵器を持っている国があります。日本が戦争を経験したから、私たちは戦争について学ぶことができて平和に暮らせているけれど、戦争を繰り返してはいけないと思います。そのためには、私たちが広島で学んだことを活かして、より多くの人に伝えていくべきだと思いました。

また、私が広島で特に心に残っているのは、平和記念公園の千羽鶴です。そこには、日本だけでなく、世界各地から年間１万 3000 以上の千羽鶴が贈られているそうです。その鶴の多さから、世界には平和を願う人がこんなにも多くいることを知り、とても嬉しくなりました。この活動がもっと広まり、平和を願う人がもっと増えてほしいです。

現地では、新しく気付いたことや感じたことがたくさんありました。この経験を活かして、これから平和を願い、自分なりに行動していきたいです。

広島で学んだ原爆の怖さ

立田中学校　杉村　宗建

僕は今回広島派遣に参加し、戦争の中でも非常に大きな出来事となった原爆投下が、広島の町にどのような惨劇を起こしたのかということや、戦争にどのような影響を与えたのかということについて学習し、考えました。

まず原爆によってどれほどの被害が出たのかについてです。８月６日の午前８時 15 分に広島に原爆が落とされました。原爆が爆発した時にできた火の玉の表面の温度は、太陽と同じくらいになり、爆心地から３.５km 程離れた人でさえも、軽いやけどを負うほどでした。原爆の影響で、約 34 万人が亡くなっています。また、恐ろしいのが、原爆症という放射線による病気で、なんとか生き残った人でも、後に病気になり、今でも苦しんでいる人がいるということです。当時の広島の状況は、まさに地獄のような光景だったと思います。原爆で焼け焦げてしまった人、水が蒸発したことによりのどが渇き、水を求めて川へ向かって歩く人、助けを呼ぶ人。考えるだけで恐ろしくなります。また、原爆の影響で増えたのが、戦争孤児です。生きようと必死に働いている写真を見て、胸が苦しくなりました。

では原爆が落とされたことによって、戦争にどのような影響を与えたのでしょうか。僕は原爆投下が、終戦を決断させる大きな要因になったと思います。日本は敗戦をなかなか認めず、抵抗を続けていましたが、たくさんの人が亡くなったことで、敗戦を認めざるをえなかったのだと思います。

多くの被害をもたらした原爆は、二度と使われてはいけないものだと思います。日本は唯一原爆を落とされた国として、そのことを世界中に伝えていくべきです。広島のような惨劇をもう起こしては行けません。核のない世界を目指して、僕たちにできることを考えていきたいと思います。

小さな平和の積み重ね

立田中学校　伊藤　未來莉

私は、非核平和広島派遣事業を通して多くのことを学び、感じることができました。

非核平和広島派遣事業に参加するにあたり、事前に資料に目を通していたものの、実際に直接自分の目で原爆ドームや展示物を見ることで、戦争の痛ましさ、そして広島の人々の日常を一瞬にして奪った原爆がどれほど強力で恐ろしいものだったのかを、今まで以上に感じることができました。

袋町小学校で見た、黒板代わりの壁に書き残されたたくさんのメッセージからは、当時の差し迫った様子が感じられ、とても悲しい気持ちになりました。さらに当時の様子を収めた写真や実物などがいくつも展示されていましたが、正直思わず目を閉じてしまうほど痛ましい資料もありました。

平和記念式典では、世界中からたくさんの方が参列されていました。参列したからこそ感じられるその場の張り詰めた空気に少し緊張しました。

こども代表による『平和への誓い』の「今も世界では戦争が続いていて、79 年前と変わらず、生きたくても生きられなかった人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちがいます。この先、平和をつくっていくのは私たちです。願うだけでは平和は訪れません。」という言葉が深く心に響き、とても共感しました。さらに、被爆者の方は年々減少しています。戦争のこと、原爆のことを直接聞けなくなっていく今、戦争の残酷さ、原爆の痛ましさ、被爆者の方々の苦痛や苦悩を、私たちが必ず次の世代や世界に伝え続け、平和な世界を守らなければならないと強く感じました。

最後に、今、私たちが平和を願って、まずできることは自分の周りの人たちを笑顔にすること、幸せにすることだと思います。その小さな平和の積み重ねで、どうか世界から戦争や核兵器によって、これ以上大切な命が奪われませんように。争いによって悲しい涙を流す人、国がなくなりますように。

日本の未来をつくる

立田中学校　宮崎　琥太朗

僕が、非核平和広島派遣事業に参加した目的は、「原爆の悲惨さを学習し、自分の学校のみんなに知ってもらう」ということです。しかし、広島で過ごしていくうちに、新たな目的ができました。様々なことを知ったからです。

広島の風景は、とても原爆が落ちたとは思えないものでしたが、袋町小学校、平和記念資料館や原爆ドームを見学した後には、考えが一変しました。袋町小学校には、伝言文字が記載されている壁、当時の写真や映像が残されていました。すべてを見学し終えると、僕の心には、「どうして罪なき人たちが辛い思いをしなければいけなかったのか。」と深い苦しみと怒りの感情が溢れていました。原爆ドームでは、爆心地はここではないと知り、「それなのに建物がこうなってしまうのか。」と原爆の恐ろしさを再認識しました。そのくらいに酷い物を見ました。

平和記念資料館にも訪れました。館内には多くの人がいて、日本人以外の人も見学していました。平和について考えている人が世界中にいるとわかり、少し安心しました。館内には当時の写真や絵、残された物などが数えられないほど展示されていました。中には、人骨の写真もありました。僕は、このような被害を出した原爆が憎いと感じたと同時に、なぜ当時の日本政府は、もっと早くポツダム宣言を受け入れなかったのだろうかと思いました。もし受け入れていたら、このようなことは起きなかったかもしれないのに。

２日間広島で過ごし、学習するなかで、「僕たちが、日本の未来をつくっていく」という自覚が芽生えました。今、この瞬間にも戦争をしている国や地域があります。この事実は非常に残念なことです。どうして世界から「核」が無くならないのか。どうして手を取り合わないのか。いつかこの世から核が無くなり、すべての人が笑顔でいられる、そんな世界を僕らがつくらなければなりません。

被爆者の方々のために

八開中学校　西川　幸希

「このようなことがあってはならない」、「平和を願う」。

このような言葉をたくさん聞いてきました。８月６日に行われた平和記念式典では、たくさんの人が、平和への思い、願いを一生懸命に語っているのを聞いて、何とも言えない悲しい気持ちになりました。前日に平和記念資料館を見学した時に、同じ気持ちになったことを思い出しました。原子爆弾がどれだけ悲惨なもので、どれだけの人を苦しめたのか想像もできないほどの怖さを感じました。普通に暮らしていた時間が、ひとつの爆弾によって、核兵器の力によって、一瞬にして消え去ってしまったこと、たった一発の爆弾で多くの人の未来を奪ったことを知りました。きっと私たちと同じ中学生もいたと思います。みんな夢と希望をもって生活をしていたはずです。平和記念資料館には、当時の様子を物語っている資料だけではなく、多くの人々の思いも溢れていました。家族や友達など大切な物を奪ってしまう、この恐ろしい戦争というものは、この先、絶対にあってはならないと強く感じました。

今、私たちのできることはなんだろうか。まずは、今回、広島に行って学んできたように、戦争や原子爆弾のことをよく知ることだと思います。そして、「もうこんなことがあって欲しくない」という被爆者の方々が感じたであろう思いを、広島派遣事業に参加させていただいた私たちだからこそ、人に伝えていかなければいけないと思いました。

今も戦争をしている国があります。争いをなくすために、一人一人が周りの人を思いやり、世界各国が仲良く平和になる日が来ればいいのにと願うばかりです。そして、被爆者や戦争体験者の方々の経験を無駄にしないために・・・。

「平和」をつくる

八開中学校　福田　悠真

「助けて。」動けず、もがく母親。

「目を開けて！」子どもの名前を半狂乱に呼び続ける母親。

1945 年８月６日、午前８時 15 分。その瞬間に広島での日常は爆風と共に消えた。僕は、平和記念資料館を訪れた際、この地獄のような風景を目の当たりにし、原子爆弾、核兵器の恐ろしさを痛感した。それは、僕の想像をはるかに超えたものだった。全身の皮膚がただれて、服か皮膚か分からない程の全身やけどをしている人。物に挟まれ骨まで見えている傷。跡形もない三輪車。展示を見た時に感じた恐怖や胸が締め付けられるような思いは、一生忘れないと思う。

また、平和記念式典では小学校６年生の２人による「平和への誓い」があった。「願うだけでは平和は訪れない。平和をつくっていくのは私たちだ。」という言葉が僕の心に残った。僕は今まで平和を願っていただけで、何も行動していなかったかもしれない。一人一人がこの悲劇についてよく知り、よく学び、同じ過ちを繰り返さないために何をすればよいか考える必要があることに気づかされた。僕たちの行動によって、この国、そして世界の平和が守られていることを知った。

今回の広島派遣事業を通して、当たり前の生活や平和な毎日は当たり前ではなかったこと、そして、今の平和を守るために僕たちも行動しなければいけないことを知った。願うだけではいけない。僕たち一人一人が、平和を守るために自分ができることを考え、全うする。それが世界の平和に繋がっていくと僕は思う。まずは、全校生徒に伝えることから始めていきたい。

平和な世界

八開中学校　鶴見　明梨

私は、この２日間の広島派遣事業を通して何気ない日常がとても幸せで、平和であることがどれほど大切なのかを改めて感じました。

平和記念公園を訪れたとき、本当にここに原爆が落とされたとは思えないくらい綺麗な街並みが広がっていました。しかし、振り返ると、そこには今にも崩れそうな原爆ドームが建っていました。こんな姿にも関わらず、今も残されていることから、悲劇を後世に伝えたいという多くの人の思いが伝わってきました。また、平和を象徴する千羽鶴からは、多くの人の平和への強い想いを感じました。

平和記念資料館で見た、原爆投下前の広島は、現在の街並みにとても似ていると感じました。しかし、原爆投下の写真は、どこが道路なのか分からない状態で、建物もごく一部しか残っていませんでした。原爆の恐ろしさを感じました。また、資料館の壁に書かれた説明文からは、原爆投下直後の人々の様子が頭の中に何度も浮かび上がりました。展示されている写真や、遺品はどれも顔をしかめてしまうほど悲惨なものばかりで、今でも目に焼き付いています。そして生き残ることができたけれど、原爆病に苦しめられている人が大勢いると知り、心が痛くなりました。

翌日の平和記念式典では、平和を願うだけでなく、自分たちが平和を作っていくためにお互いを思い合った交流や個性を尊重することが大切だと学びました。

世界では、戦争をしている国があります。しかし、私たちが訪れた広島には多くの外国の方の姿があり、戦争について、平和について考えたいという思いが伝わってきて、とても嬉しく感じました。広島派遣事業に参加させていただいたことは、私にとって大きな経験になりました。学んだこと、感じたことを家族や友人、学校で伝えたいと思いました。

私たちにできること

八開中学校　福田　唯乃

戦争を経験していない私たちは、どのように戦争と向き合い、考えていけばよいのだろうか。平和記念資料館では、原爆の被害にあった方々の悲惨な様子を目にし、自分に起きたことを想像し、怖い思いをした。しかし、それは授業や事前学習で資料を見た時と同じ感情でしかないように思えた。そのようにしか感じられない自分を残念に思った。現地で色々なものを見れば、たちどころに戦争の本質が掴めるものだと思っていたが、そのようなことは起きなかった。

それはなぜだろうか。資料館には「原爆で亡くなったのは、私たちと同じ一人の人間であったこと」を伝えたいという意図で展示がなされていた。「戦争は人間が亡くなるものであり、悲しいものだから、二度と起こしてはならない」というメッセージが感じられるものだった。そんな被爆者の気持ちが全面に出ている展示だからこそ、それ以外の視点から戦争を考える必要はないのだろうかという疑問が生まれてきた。

戦争を経験した人からすれば、人生を変えてしまうほど重大な出来事だったのだから、感情を理由に反対するのは当然だ。しかし、展示を数分見た程度で理解できるものではない。ましてや、経験した人たちと同じ立場で「二度と戦争は起こしてはいけない」「戦争は悲惨である」と語ってはいけないと思う。戦争を感情の面から語ることは、経験した人の役割であり、私たちにできることではない。

では、私たちはどのように戦争に向き合うことができるのだろうか。それは、戦争の歴史を学び、理解していくことだと思う。戦争には、主導した人、賛成の立場で参加した人たちもいるだろう。戦争を経験していないからこそ、様々な立場の人の視点から戦争を考えていかなければならないし、考えていけるのではないだろうか。

今回の広島派遣事業を通じて「戦争はいけない、原爆は恐ろしい」と言ってしまうのは簡単である。しかし、そこで思考を停止させず、戦争について学び、冷静に考えていくことが私たちにできる平和への一歩であると感じた。

今僕たちにできること

佐織中学校　宮本 悠生

「今の幸せは当たり前ではない。」、二日間広島で学んで率直に感じたことです。今までの僕は核兵器について、ときどき学校の授業やニュースなどで聞くことはあっても核兵器について深く考えたりすることはありませんでした。しかし、実際に被害を受けた建物や資料に目を向けていくこと、今まで現実味のなかった核兵器が急に現実味を帯びてきました。より多くの人に核兵器の被害の実態や、核兵器の恐ろしさについて知ってもらいたいと思いました。僕が非核平和広島派遣事業で、特に印象に残ったことを２つ紹介したいと思います。

１つ目は、袋町小学校の壁に書かれた伝言です。短い文章でも一語一語に込められた思いを考え大切な人を必死に探している方たちの姿を想像すると胸が苦しくなりました。僕はこのような体験をしたことがありません。ですがこんな僕でも当時の様子、被爆した方々の悲しくて苦しくてどこに向ければよいかわからない気持ちを想像したりすることができる資料が袋町小学校にはありました。

２つ目は、平和記念式典です。平和記念式典では来場者の多さが印象に残っています。一般の方の来場者数も多かったのですが、特に海外の方の多さが印象に残りました。国内だけでなく国外からも平和記念式典が注目されていることから核の被害の大きさを一日目に学んだところから改めて感じることができました。先にも書きましたが、僕は一日目と二日目を通して、今の幸せが当たり前のものではないと感じました。

被爆者の平均年齢も高まってきていると学びました。なので今回の非核平和広島派遣事業をよいきっかけとして、これからも核について学び続けて家族、友人と知識を共有して自分より下の世代にも語り継いでいけるようにしたいです。

広島派遣を終えて

佐織中学校　遠藤 陽大

最初に平和記念公園の原爆ドームを訪れました。僕は、原爆ドームの鉄骨が剥き出しになり、瓦礫がたくさん散らばっているのを見て、原爆は自分たちが普段から住んでいるようなとても硬い建造物を数キロも離れているのに一瞬で吹き飛ばしてしまうということに恐ろしさを覚えました。実際にその場を訪れ、その空気に触れてみると、胸からなんとも言えない気持ちが込み上げてきました。

また、原爆ドームの被爆前・被爆後の模型があり、それを見ると、原爆ドームが被爆後には半分以上無くなっていて、無くなっていないところも、壁が壊れていたり、鉄骨が見えるようになってしまっていたりなど、原爆の威力をひしひしと感じました。

次に、袋町小学校へ行きました。そこでは、原爆が投下された後の状況を知ることができました。僕は、原爆が投下されて怪我をしていたり、疲れていたりする状況で必死になって家族を探していたということを知り、尊敬と感動の気持ちでいっぱいになりました。

その後、平和記念資料館へ行きました。そこにある、被爆した服や当時の広島の絵などさまざまなものが全て広島の悲惨さを表しており、黒い雨・吹っ飛んだ仏像・焼けただれている皮膚の絵など、見れば見るほど悲しく辛い気持ちが込み上げてきました。

最後に平和記念式典へ参加しました。そこには、広島市長や原爆で亡くなられた遺族の方々、岸田首相をはじめとした、大臣や国際連合の方などが集まっていました。他にも、日本人だけでなく外国人の方も大勢訪れており、それほど、この平和記念式典は日本や世界にとって大事な出来事だということが伝わってきました。式典の平和宣言の中では、日本を最後の被爆国にするという決意、現在の情勢を含めた課題・これからの方針などについて話されていました。その内容は自分では到底思いつかないような世界情勢と結びつけ、原爆に対する強い決意などたくさんの気持ちが話されました。

戦争を二度と起こさないため、僕がこの旅で経験したことを、他の人に伝え、みんなで平和へと歩んでいきたいです。

広島で学んだこと

佐織中学校　佐伯 柚歩

私は、８月５日と６日の２日間、市の事業として広島派遣に参加してきました。

広島に到達し、いろいろな資料館や被爆地に行くことができました。その中でも私が特に心に残った場所があります。１日目に行った、「広島平和記念資料館」というところです。資料館には被爆者の方の遺品となる服や被爆直後の写真。そして、私が広島に行って最も学びたいと思っていた、「原爆によって何がどうなってしまったのか」を知ることができる展示、言葉などがたくさん展示してありました。

この資料館の中で、特に印象的だった展示物がありました。それは、「人影の石」というものです。これは、階段に座っていた人が逃げることもできないまま亡くなり、原爆の強烈な熱線により階段は白っぽく変色し、腰掛けていた部分が影のように黒くなっていったことから「人影の石」と呼ばれているそうです。この展示品は爆心地から 260 m離れた場所にある銀行の入口階段を切り出して移設したものだそうです。「人影の石」を見て、原爆が爆発した時に本当に人がいて、その何十万人もの尊い命がなくなってしまったということを改めて感じさせられました。この人影が、自分の親族のものではないかという意見も多くの遺族から寄せられているそうです。

２日目には、広島平和記念式典に参加することができました。式典にはたくさんの国の偉い人が参加していて、世界中の人が核兵器のない未来を望んでいるんだなと改めて実感することができました。式典の最初に、「原爆死没者名簿奉納」という時間がありました。これは、原爆により死没した方やその後に死没した方の霊を慰め、人類の恒久平和を祈念するというものです。そこで追加奉納数が発表されていたのですが、その数 5,079 名で、私にはとても多く感じられました。原爆投下から 79 年経った今でも、たくさんの人々が行方不明者を探し続け、世界中の多くの人が平和を祈っている。そんな今が、私は素晴らしいと思いました。しかし、今日もまた戦争によって世界中の命が亡くなっているという現実もあります。世界から完全に核兵器をなくし、被爆者の方が亡くなられてしまいこの悲惨な出来事が忘れられてしまうことがないように、広島で学んだたくさんのことを、後世に伝えていきたいと思いました。

広島を訪れて

佐織中学校　宇佐美 結女

私は、広島を訪れて原子爆弾の恐ろしい被害、平和の大切さ、今の戦争と平和について学びました。

１日目は、実際の遺品や傷を負った人たちの絵、原子爆弾が投下されるなんて知らない笑顔の遺影、赤色で紙一面が塗られた燃え盛る街の絵などを見学しました。私は最初に、ここで戦争が本当におきたんだと感じました。原子爆弾が投下されたということが想像できなくて映画のような感覚だったからです。しかし、平和記念資料館で被爆した方の顔写真と名前の展示を見て、この人がその日まで、私と同じように生きていたこと、この爆弾で亡くなったことを鮮明に教えてくれました。そして、戦争の虚しさを感じさせられたのは、資料館での亡くなった中学生の学生服の展示です。右の袖は全部なくて、焦げてボロボロでした。そして、着ていた中学生の姿がすごく小さかったです。当時の日本人は食糧不足で今の平均と比べるとすごく小さかったそうです。それを聞いて私は、なんとも言えない悲しさを感じ、私たちが生きている今がすごく幸福な環境であることを感じました。

２日目は、平和記念式典に参加しました。外国人の方がとても多くて、原爆のことを知ろうと、式典に参加して平和を願おうとしていることに嬉しくなりました。式典の中で私は、ここにいるみんな平和に過ごしたいと思っているんだ、と平和への希望やこれからもずっとこのまま平和に過ごしていけるかもという安心感を感じました。

しかし、後日のニュースで長崎の平和記念式典にイスラエルが招待されなかったことで、アメリカをはじめとした主要国が式典に参加しなかったことを知りました。今も世界は完全に平和とは言えないのです。一緒に平和を願っていたのにどうして？外交は複雑なんだろうなとその時は思いました。しかし、外交といっても人と人の話し合いなのだから、私たちと同じじゃん！と気づきました。戦争も人と人の大きな喧嘩です。喧嘩をしたときは、謝らないと終わらないのです。逆に、謝れば終わるかもしれないのです。単純なことに気づいて平和への近道を見つけたような気がしました。今も戦争はたくさんあります。私が死ぬまでに戦争をなくせますように。

広島の音

佐織西中学校　伊藤 陽南

私は、今回広島に行って、見たもの、感じたものがたくさんあります。社会の教科書などで見ているものとは全く違う、想像を絶するような体験でした。このような体験をさせていただいたことに、とても感謝しています。

鶴の展示では、「平和への願いをこめて」という思いが書かれている文章とともに、きれいに折られた折り鶴を見ました。他にも「平和」という文字が書かれていたり、平和に関する文章がたくさん見られたり、平和に対する強い思いを感じることができました。平和記念資料館では原爆が投下される前の広島市と投下された後の広島市の写真が比較できるように展示されていて、その前後の違いがはっきり分かってしまうほどに悲惨な状態が見て取れました。原爆が落ちる前はかわいい子どもたちの笑顔が多く見られ、そこに幸せな生活があったことを知りました。しかし、原爆投下後の広島では子どもたちの笑顔が消え、川が死体であふれ、とても言葉にできるものではない惨状がありました。

私は、資料館にあった「一発の原子爆弾が無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えました。広島平和記念資料館は、被爆資料や遺品、証言などを通して、世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え、ノーモアヒロシマを訴えます。」という文章に感銘を受けました。この文章からも分かるように広島から核兵器廃絶を強く訴えようとしていることがよく分かります。実際、世界の中で原子爆弾が投下されてしまったのは、広島と長崎だけです。広島の人たちの中には、今も原爆の影響で苦しんでいる人たちがいます。そのような方々に、もうこれ以上苦しい思いをさせないために、世界中で戦争をやめ、お互いに助け合う世界をつくっていくことが大切だと思います。現在も戦争をしている国はあります。だからこそ、戦争がいかに人の人生を変えるかを私たちが伝え、世界平和を作ることが大切だと思いました。

犠牲と平和

佐織西中学校　野口 斗希

私は、非核平和広島派遣事業に参加し、原爆が広島にどのような被害をもたらし、そこから私たちが学ぶべき教訓を得、平和の尊さについて改めて考えました。

平和記念資料館では、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真が展示されており、それらの展示品から、たった一発の原子爆弾が広島を地獄のような状態に陥れ、多くの人々の人生を狂わせ、今も被爆者を苦しめ続けていることを知り、これまで以上に核兵器は何があろうと絶対に使ってはいけないという思いが強くなりました。

平和記念式典では、原爆死没者名簿の奉納から始まり、ひろしま平和の歌の合唱で幕が下りました。式典では、戦争で命を落とした多くの人々への哀悼の意が表され、その場にいると、平和がどれだけ尊いものであるかを実感することができました。そして、現在の私たちの平和な生活が、戦争犠牲者の苦しみの上に成り立っていることを知り、自分が平和な時代に生きていることへの感謝の気持ちとともに、この平和を守っていく責任を感じました。

過去の過ちを二度と繰り返さないためには、戦争の歴史を正しく学び、次の世代に伝えていくことが不可欠です。そして、平和を願う気持ちだけではなく、平和を維持するための具体的な行動も求められます。この事業を通して、私は、私たちが平和を守るためにできることを真剣に考えるようになりました。平和を守るためには、一人一人が歴史を学び、争いを避けるための努力を続けることが必要です。これからは、私たちの平和な生活が多くの犠牲の上に成り立っていることを忘れず、未来の社会の平和を維持するために私たちにできることを考え、小さなことでも積極的に行動することで、平和な社会をつくるための一歩になると考え、普段の生活のなかで自分ができることをしっかりやろうと思います。

戦争は怖い？

佐織西中学校　平野 登有

私は、戦争を体験したことがないので、少しでも戦争のことやその時を生きた人たちの思いを知りたいと思い、非核平和広島派遣事業に参加しました。

実際に参加して、戦争はどれだけ悲惨で残酷なものなのかを実感することができました。私は平和記念資料館を見学したり、平和記念式典に参加したりして特に感じたことが３つあります。

１つ目は平和記念資料館に展示してあった写真です。原子爆弾が投下されて人々がどれだけ苦しい思いをしたのかが分かる写真がたくさん展示されていました。私はこれらの写真を見てとても苦しい気持ちになりました。また、79 年前の広島は本当に悲惨な状態だったということがよく分かりました。

２つ目は平和記念式典です。原子爆弾によって多くの尊い命が失われたことを決して忘れず、後世に語り継いでいかなければならないということを、たくさんの方のお話を聞いて心に深く刻むことができました。また、平和記念式典でのこども代表の「違いを良さととらえ、自分の考えを見なおすこと」という言葉にとても共感しました。

３つ目は被爆した袋町小学校の壁です。被爆した小学校の壁には、被爆した人の名前や心の叫びが書かれていました。その名前、文章を見るたびに、戦争の残酷さと平和への願いが私の胸にせまってきました

この事業に参加して、自分自身の生き方を見つめなおし、どうしたら自分が平和に貢献できるかを考えることができました。平和を守るためには小さな日常の積み重ねが大切だと思います。今後も平和への願いを持ち続け、少しでも自分も平和な世界を築くことに貢献したいと思います。そして今回、戦争の恐ろしさ、核兵器の恐ろしさを学びました。この学びを、私はこれから多くの人に伝えて、平和の大切さを広めていきたいと思います。

広島へ行って

佐織西中学校　水野 和泉

私は、非核平和広島派遣事業に参加し貴重な経験をさせていただきました。

まず、広島について最初に目にしたものは原爆ドームです。教科書などで見たことはありましたが、実際近くで見ると胸が痛みました。この日はとても暑かったせいか、近くに流れる川の水を求める人々の姿が想像され、涙がこみ上げてきました。

平和記念資料館では、想像を絶するほどの悲惨な写真や展示物がありました。多くの血を浴びたまま、茫然と立っている少女、やけどで全身がただれ、口から血を吐いている人、布でくるまれたたくさんの子どもの遺体を運んでいる様子、誰か分からない、無数の人骨など、見るに堪えない写真がいくつもあり、胸が締め付けられました。そして川に浮かぶ無数の遺体を引き上げるために使った道具、黒い雨をあびて斑点が残った服やリュック、座っていた人の影の形だけが残った石段、半分溶けた仏像、ケロイドになった皮膚などの展示物からは被爆した人々の悲鳴が聞こえてくるような気がしました。外に出て、自分が奉納した千羽鶴を見て、「あの地獄を二度とつくってはいけない」と強く平和を祈りました。

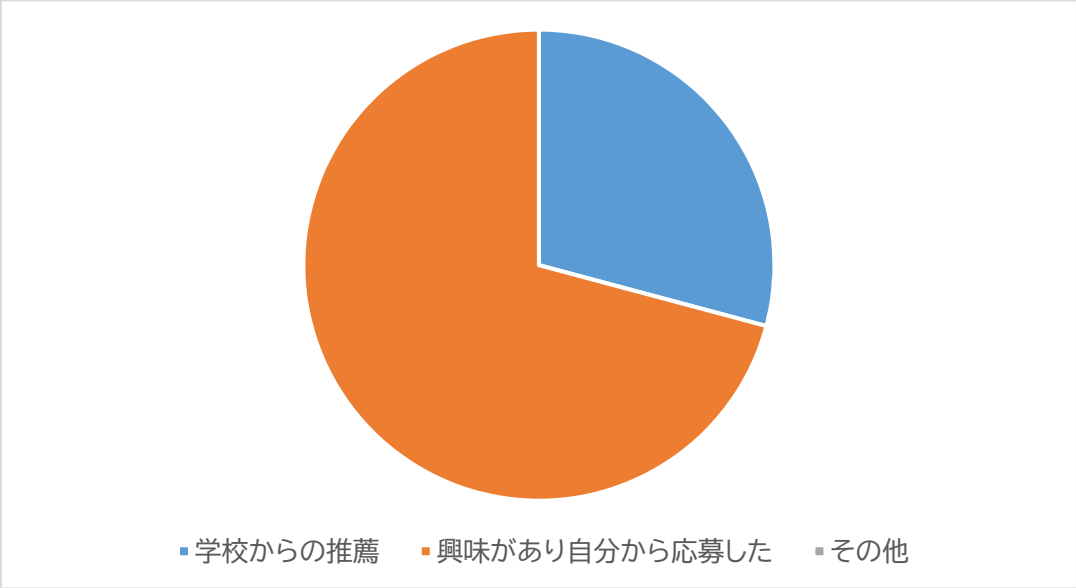
翌日は、平和記念式典に参加しました。そこにはたくさんの参列者と報道陣がいて驚きました。そして、参加者の中には多くの外国人の姿がありました。世界の人にこの凄惨な核兵器の実情を知って欲しい、核を持たない勇気をもってほしいと思いました。

帰宅後、家族にこの事業と通して体験したことを家族に話しながら、平和に暮らしている今に、感謝しました。

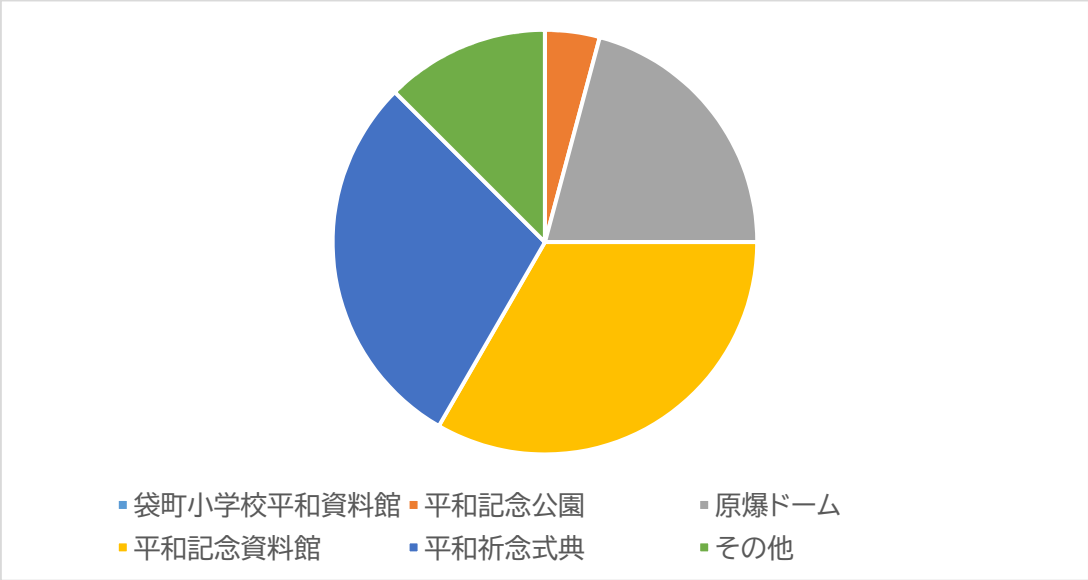
実 施 後 ア ン ケ ー ト

非核平和広島派遣事業を通して、参加者の平和に対する思いや考え方の変化などを知るために参加した生徒へ実施後アンケートを行いました。

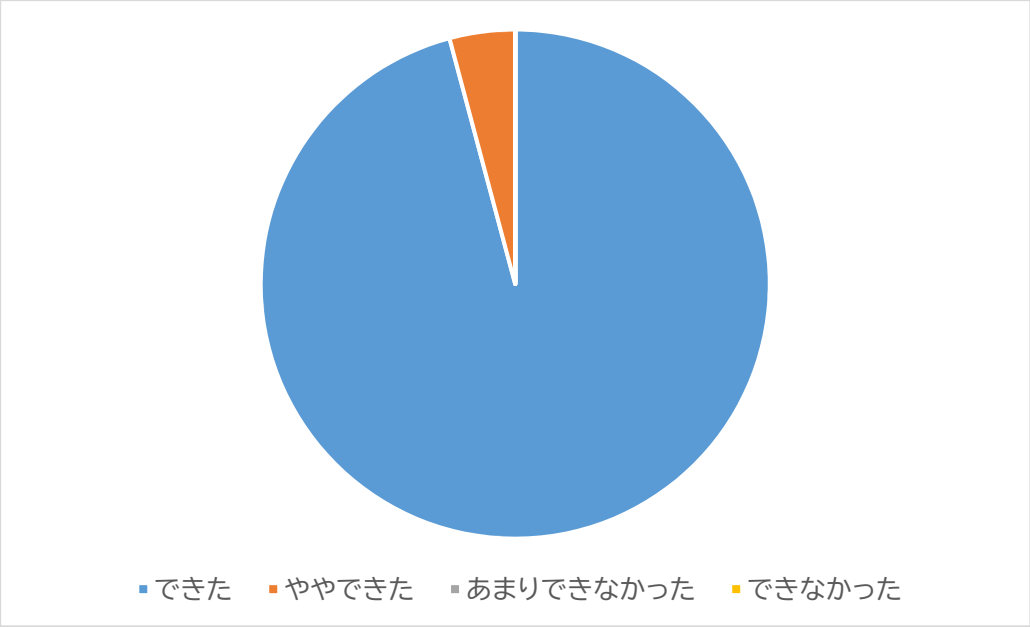
① 事業に参加したきっかけを教えてください。



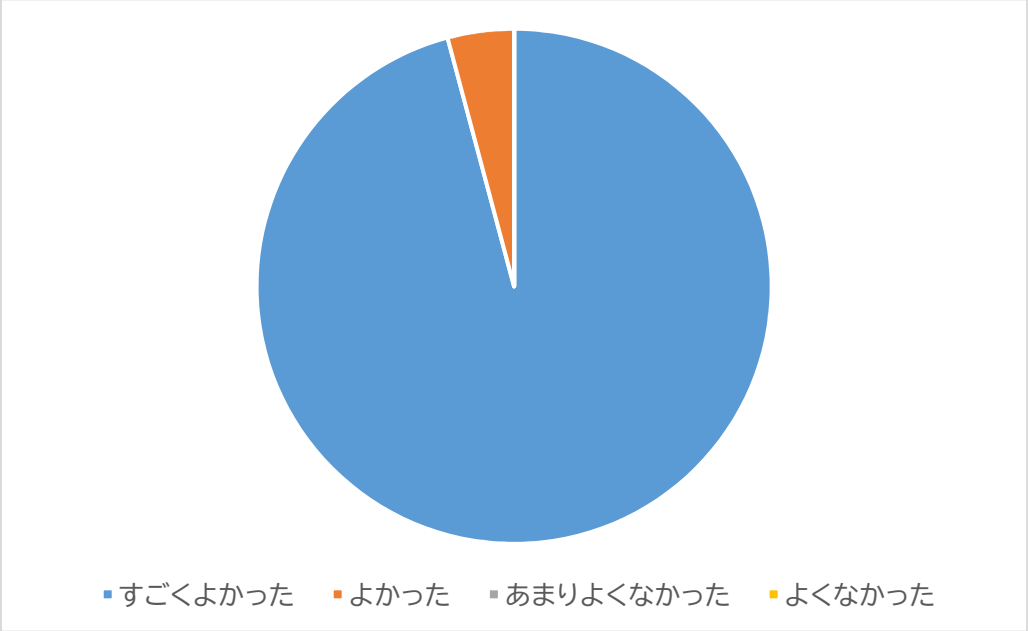
② 事業の中で良かったものはなんですか。



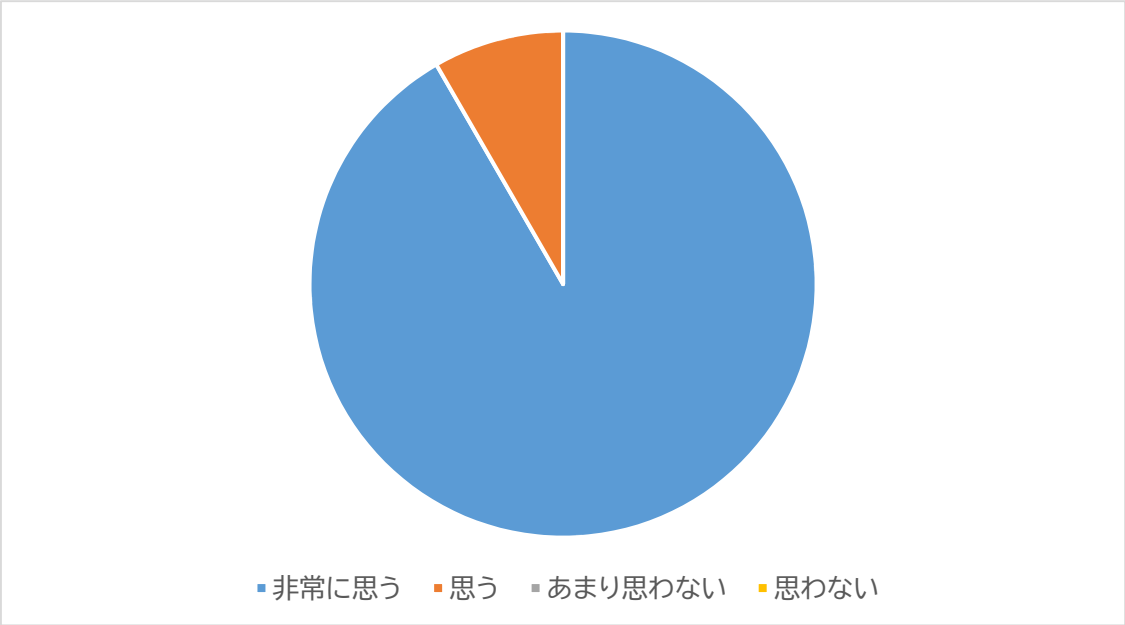
③ 事業を通じて平和について学ぶことができましたか。



④ 事業に参加してみて良かったと思いますか。



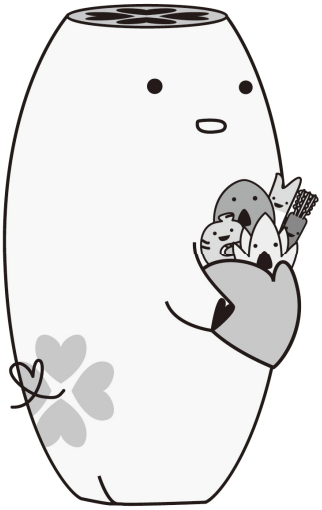
⑤ 今後も平和について学びたいと思いますか。



⑥ 全体を通してよかったこと・困ったことなど素直な感想をお聞かせください。
（一部抜粋）

・戦争・原爆の恐ろしさを学ぶとともに、たくさんの人々の平和の願いも学ぶことが出来ました。色々な所に回って、今まで知らなかったこともたくさん知ることができてよかったです。

・平和を実現させるのは難しいことだと思った。まだ広島に行く前「世界はとても平和」と思っていたけれど、広島にいって、「まだまだ、平和には程遠いな・・・」と少しショックだった。まだ、人の差別や尊重し合えない、なにも得しない長期にわたる戦争など、解決していない課題がまだまだある。それを平和的解決が大切だと思う。誰も傷つかない解決はないと思うけど、なるべく人の負担がかからない解決してほしいと思う。

・平和記念資料館で当時の様子や戦争の悲惨さを知ることができたり、平和記念式典にも参列することができたりして、平和を守るための行動の大切さをあらためて感じることができました。

・平和のことについて、たくさん知れたので家族や友達など、いろんな人に話していき、たくさんの人たちに知ってもらいたいです。